

TOBUNKEN NEWS

2010
no.42



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

スリランカにおける文化遺産保護状況等に関する調査



修復再開直後のリティガラ僧院遺跡

4月4日から13日まで、外務省の依頼により、スリランカにおける考古遺跡等の文化遺産保護に関する取組状況についての現地調査を外部専門家とともに実施しました。同国では、四半世紀に及んだ内戦が昨年終結したばかりで、この間に資金難等の要因から停滞を余儀なくされてきた文化遺産保護の分野でも新たな

進展が期待されているところです。わが国としても今後ユネスコ等を通じてどのような協力支援が可能か、検討するための基本的情報を収集することが今回の主な目的でした。

本調査では、世界遺産既登録地における保存の現状や今後の整備方針等について現地視察および関係機関への聞き取りを行ったほか、将来



修復中のアバヤギリ大塔（アヌラダプラ遺跡群）

的に登録の可能性がある複数の遺跡についても実地調査を行いました。その結果、各々の保存計画は存在するものの実現の見通しが立っていないものが多いことや、専門的人材の不足をはじめ、遺跡の保存管理体制面においても深刻な課題が少なくない状況であることが認められました。これよりのち、具体的な協力の方向性を検討する過程にも積極的に参画していきたいと考えています。

（文化遺産国際協力センター・友田正彦）

ベトナム・タンロン遺跡保存事業 保存科学専門家ミッション派遣

ユネスコ日本信託基金によるタンロン遺跡保存事業は、当研究所とユネスコ・ハノイ事務所のパートナーシップ協定が4月より発効し、3年度にわたる包括的支援活動がいよいよ始動しました。5月17日から22日まで、その初ミッションとして、保存科学分野を中心に専門家7名をハノイに派遣しました。

今回はまず、発掘された考古学的遺構の保存措置検討のための基礎データ収集を目的に、既設気象観測装置の移設・改良、土壌水分センサーの設置などを行いました。また、出土遺物関係では、本格的保存方法確立までの間、一時的に水浸けされている木材遺物の保管方法に関する検討や、日本とは異なるベトナムの木材種に関する共同研究に向けた現地機関との協議等を実施しました。現場での作業は日越双方が協働して行い、作業の意義を正確かつ詳細に理解してもらうため、若手スタッフ対象の研修ワークショップも開催しました。歴史研究や保存管理計画策定支援といった各分野の事業活動についても、今後順次、実施に移していくこととなります。



移設中の気象観測装置



土壌水分センサーの設置作業

（文化遺産国際協力センター・友田正彦）

トルコ・カッパドキア石窟教会壁画 の保存修復に関する基礎調査

文化遺産国際協力センターでは、「西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業」の一環として、国際的な保存修復支援が予定されているトルコ・カッパドキアに点在する石窟教会壁画の基礎調査を6月19日から29日にかけて行いました。ギョレメ国立公園からチャヴシン、ゼルヴェの谷、オルタヒサル地域一帯を中心に、9世紀から13世紀頃の壁画が残る石窟教会等の遺構約20件を対象に保存状態を調査しました。現地専門家や、ユネスコが招聘した国際保存修復専門家とともに、壁画そのものに加えて、それが描かれた石窟自体の岩盤や地質の問題についても調査を行うと同時に、将来的なモニタリングの方法などについて議論し、今



外観が整備されたエル・ナザール教会

後の保存修復に向けた助言を行いました。

(文化遺産国際協力センター・鈴木 環)



ギョレメ国立公園全景

フィルモン音帯の調査

フィルモン音帯とは、戦前の日本で開発された特殊なレコードです。形状は合成樹脂製のエンドレステープ（約13メートル）で、最長で36分間の録音が可能であったといわれています。

無形文化遺産部は音帯5本を所蔵しています。音帯には専用の再生機が必要な上に、再生機の現存そのものが極めて少ないので、録音の内容確認すらこれまではできませんでした。

昨年度より、早稲田大学演劇博物館（演劇映像学連携研究拠点）と共同でフィルモン音帯の調査を行うことになりました。演劇博物館は再生機を動態保存しているので、音帯の再生音をデジタル化することも計画に含まれています。現在、無形文化遺産部と演劇博物館、それに個人蔵の音帯を加えると、延べで100本以上の現存を確認することができました。

残念ながら、経年劣化が著しいために、再生が難しいものも相当数ふくまれています。少しでも多くの音帯から再生音が得られるよう、現在、作業を進めているところです。

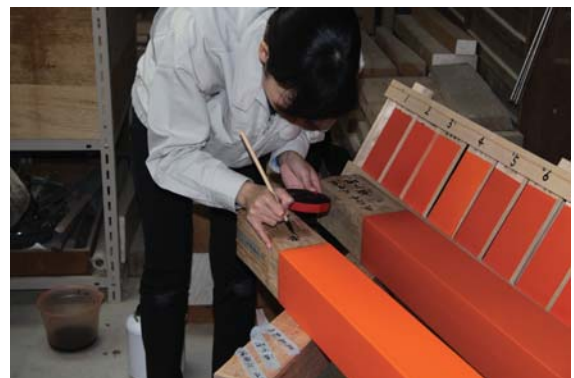


フィルモン音帯

（無形文化遺産部・飯島 満）

厳島神社における外観塗装材料の劣化に関する調査

保存修復科学センターでは、「伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究」プロジェクトの一環として、厳島神社における外観塗装材料の劣化に関する調査を行っています。厳島神社といえば青い海に浮かぶ鮮やかな朱色の社殿のコントラストの美しさで広く知られていますが、何分海水と接する厳しい環境下に建造物自体が曝されています。そのため、せっかく塗装した朱色の外観塗装材料の黒化現象が比較的短時間で発生したことが関係者の間で問題となってきました。そこで保存修復科学センターでは、この黒化現象の原因追求を実験室レベルで行うとともに、厳島神社工務所の皆さんと共同で、これまで厳島神社の外観塗装材料



曝露試験用手板試料の作成



手板試料の設置

として用いられてきたと考えられる数々の歴代の外観塗装材料を再現した手板試料を作成し、5月13日に実際の社殿の床上と海面と接する柱の下部に設置しました。これから少なくとも1年かけて厳島神社の環境の中で曝露試験を行い、外観塗装材料の劣化の様子を観察していくことにします。この成果を厳島神社社殿の外観塗装を少しでもよりよい状態で保守管理するうえで役立てたいと考えています。

(保存修復科学センター・北野信彦)

あいみつ
鑑光「眼のある風景」光学調査

東 京国立近代美術館の協力を得て、1月18日にあいみつ（1907-1948）作の油彩画「眼のある風景」（1938年、102.0×193.5cm）の光学調査をおこないました。この折には、フルカラー撮影と反射近赤外線撮影をおこないました。この2種類の画像は、現在、原寸大のパネルとして当研究所の2階に展示しています。

これにつづき、4月27日には、透過近赤外線撮影による調査を実施しました。作品が修復される折から、木枠を外した状態で、作品の裏面から光を透過させて、キャンバス面にもっとも近い、すなわち制作当初の画像を捉えることができました。この作品は、日本の近代美術のなかで、シュルレアリスム絵画受容における独自の表現が認められることから、高い評価を受けています。しかし、創作の過程やモチーフについては、いまだに議論がかさねられています。前回の反射近赤外線、今回の透過近赤外線撮影による画像をもとに、これから詳細に検討しなければなりません。しかし今回の画像をみるかぎり、少なくとも動物とも、植物ともつかない、不可思議なメタモρφosis（変態）をとげていくフォルムに、画家が抱いたイメージの深さとそのイメージをリアリティのあるものとして視覚化しようとした模索の跡をみとめることができます。

(企画情報部・田中淳)



当研究所2階における画像展示風景

大エジプト博物館 保存修復センター 人材育成研修の開催と開所式

文化遺産国際協力センターでは、国際協力機構（JICA）が行う大エジプト博物館の付属機関である保存修復センターの設立と稼働に向けた技術支援プロジェクトへの協力を続けています。

その一環として、5月14日から22日の日程で、日本人専門家3名を講師として現地へ派遣し、「IPM研修」を保存修復センター内で開催しました。IPMとはIntegrated Pest Managementの略で、ここでは文化財の有害生物被害の防除などを行う総合的管理をさします。研修前はIPMの考え方は保存修復センター職員には殆ど知られていませんでしたが、研修終了後、エジプト人が独自にモニタリングを行うなど継続的な管理活動に結びついています。

6月14日には、スーザン・ムバラク大統領夫

人が出席して、保存修復センターの開所式が行われました。現在の職員数は、保存修復専門家と他職員あわせて120名を超え、今後も増員が考えられています。また既に、センター内に数千点の遺物が運び込まれ、保存修復作業が少しずつ始まっています。

今後も、センターの本格的稼働に向けて、多様な専門家各個人のレベルにあわせた効果的な人材育成への協力を引き続き進めていきます。

（文化遺産国際協力センター・邊牟木尚美）

タジキスタンにおける壁画断片 の保存修復と人材育成 （第8次ミッション）

5月16日から6月22日まで、文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業の一環として「タジキスタン国立古代博物館が所蔵する壁画断片の保存修復」の第8次ミッションを実施しました。



大エジプト博物館附属保存修復センターでのIPM研修実習の様子



壁画のための新しい支持体の成形（タジキスタン国立古式博物館）



壁画を支持体に設置（同上）

壁画は本来、建物の壁面と一体となって安定しているものですが、これを博物館に展示するためには、壁面に代わる支持体が必要です。今次ミッションでは、支持体の軽量化とともに、その取り付けにあたって、できるだけ壁面に負担をかけないことを目指しました。タジク人研修生が主体となり、日本人専門家の指導のもと、カフィルカラ遺跡の仏教寺院址から出土した壁画2点を支持体に設置（マウント）し、博物館

に展示しました。タジク人研修生は新しい支持体の成形、壁画の設置に積極的に取り組みました。

第9次ミッションでは、カライ・カフカハ I 遺跡出土の壁画断片のマウントを行います。またこの期間中に併せて、壁画のマウントに関するワークショップを実施する予定です。

（文化遺産国際協力センター・影山悦子）

保存担当学芸員 フォローアップ研修

保 存担当学芸員研修修了者を対象に、保存環境に関する最新の知見等を伝えることを目的とした表題の研修会を6月21日に行いました。まず、地球温暖化防止などの観点から、最近急速に普及が進んでいる白色LEDについて、吉田が最新の技術動向を紹介したのち、改築を機に、展示照明として白色LEDを導入した根津美術館副館長の西田宏子氏に、そのいきさつについてご講演いただきました。

続いて、間瀬創客員研究員が、自身の長年の研究テーマでもある文化財施設における微生物調査法に関して、また佐野千絵保存科学研究室長が、木材から放出される有機酸の調査方法について講演しました。今回は、多くの文化財施設にとって関心の深い内容でもあり、例年よりも多い約100人が参加し活発な議論が行われました。

フォローアップ研修は毎年行っており、これからも学芸員のニーズにも応えながら、最新かつ重要な情報をお伝えする場にしたいと思います。

(保存修復科学センター・吉田直人)

第4回伝統的修復材料および合成樹脂に関する研究会「膠 (I)」

保 存修復科学センター伝統技術研究室では、6月21日に当研究所の会議室において「膠 (I)」と題する研究会を開催しました。膠材料は種類も多く、日本のみならず世界的にも古くから広く使用されてきた伝統的な材料の一つです。現在では伝統的な和膠の生産も希少

となり、物性を含めた実態については不明な点が多くあります。今回の研究会ではこのような背景を踏まえて、まず当センターの早川典子が修復材料としての膠の物性について概要を述べ、引き続き国宝修理装演師連盟の山本記子先生から、装演における膠の用い方という題材で



第4回伝統的修復材料および合成樹脂に関する研究会「膠(I)」の様子

装潢修理をされている技術者の立場からのお話をいただきました。さらに東京芸術大学の関出先生からは、画家というお立場から材料研究の成果についてご講演いただきました。そして最後にかつて国立民族学博物館で膠づくりの取材を行われた愛知県立芸術大学の森田恒之先生からは、映像をまじえて膠づくりの工程の解説

をいただきました。

講師の先生方のお話は、それぞれのお立場での話題提供であっただけに説得力もあり、さらに会場では関先生にお持ちいただいた膠材料を見学することもでき盛会でした。

(保存修復科学センター・北野信彦)

佐藤多持氏所蔵資料の受贈

企画情報部では、2004年に逝去された日本画家、佐藤多持氏の所蔵していた資料の一部を、多持氏の奥様である美喜子氏よりご寄贈いただきました。

多持氏は墨線による大胆な円弧で水芭蕉を抽象的に表現した「水芭蕉曼陀羅」のシリーズにより、戦後日本画の新生面を拓きました。この

度いただいた資料は、多持氏所蔵の資料のうち美術雑誌、および多持氏が仲間と昭和32年に結成したグループ「知求会」をはじめとする諸団体の目録類です。ひとまず研究所への搬入を終え、今後は整理作業を経て、戦後日本美術の貴重な資料として閲覧・活用できるよう努めて参りたいと思います。

(企画情報部・塩谷 純)



佐藤多持氏と第22回知求会展出品作《水芭蕉曼陀羅》(1978年)

Column 《オリジナルを守るーその2》

東文研ニュース36号（2009年2月28日）に“オリジナルを守る”を掲載した折に、レンガ造やコンクリート造の建造物に始まり工作機械類、最後に共用されているながら国指定の重要文化財となっているもののオリジナルを守っていく事に関して雑感を述べました。

今回はその第2弾として、特に鉄構造物について述べてみたいと思います。なぜ鉄構造物なのか、それを、最初に記しておきます。

一昨年度から、重要文化財に指定されている東京都下水道局三河島水再生センター内のポンプ井地下にある鉄扉の保存に関する相談を受けた事が契機となっています。（図1参照）

この鉄扉について、聴取した情報では、恐らく建築後一度も閉じられた事は無く、下水が通過していた為に、解放された状態で、表面に汚泥がこびりつき、鉄扉自体は確認できた範囲では層状に腐食している状況です。所有者である東京都下水道局は近い将来、整備を施した後に、期間を限って一般に地下の水路等も公開したいという考えであり、それに伴いこの鉄扉も公開したい希望を持っています。下水道局では、一般公開するに当たり、現在の汚泥がこびりついた状態で公開したい希望が強く有り、その保存方法について相談を受けたものです。

この様に、その物を保存していくことと、それを公開なり、活用していく時にどうしても相容れない部分が出て来てしまう場合があります。特に、鉄構造物は、その特性からして、現状のまま保存しようとする、錆びてしまった物をその状態のまま保存するという事につながります。これは、大型の構造物や、その構造物の主要な強度部材に当てはめるには非常に危険なので、絶対許してはいけな いと思いますが、主要な強度部材ではないような場合、採用できる可能性があるのではないかと。そう考えたのが、今回紹介する実験のきっかけです。

実を言えば、現在でも、ちまたには、腐食した鉄の表面に塗布すれば、その材料が鉄錆と反応して、造膜し、塗装の代わりをすると宣伝されている商品が存在します。しかしながら、その商品を使用す



図1 三河島鉄扉

るには、部材の錆の状態に左右される事があり、その商品だけでは、きちんと機能を果たさず、その商品の上に再度塗装を施す事が前提となっています。

腐食してしまった鉄材を保存する為に通常取る手段は、さびを落とすなど、十分な下地処理を施し、その上に再度塗装するのが一般的です。しかしながら、文化財でそ

れをする事はある意味、構造物のオリジナルを破壊する事であり、出来ればやりたくないというのが我々の本音です。また、所有者の中にも塗り替える事無く保存したいと希望する方々もいます。それでは、どうすれば良いのか、実験してみたのでそれをご紹介します。

今回、実施した実験を簡単に紹介すると以下の通りです。

10 cm × 5 cmの鉄片の片側を薬品処理により強制的に腐食させ、浮き錆をブラシでこすり落とした後

に、3種類（ウレタン、アクリル、エポキシ）の樹脂を主成分とした無色の塗料を塗布したテストピースを耐候性促進試験機の中で2000時間（約2年に相当します）、日照、降雨のサイクルを決めて劣化させる試験です。

これらの塗装を施したテストピースを図2に示します。塗料であるのでどうしても塗布した面の艶は生じてしまいますが、それについては、時間経過とともに艶は失われることも考慮に入れて実験を行いました。

実験について詳述する紙面も無いのでそれは別に譲るとして、結果は概ね以下の通りでした。

耐候性の良い順番として予想されたのはウレタン>アクリル>エポキシでしたが、ウレタンとアクリルの耐候性の差は思ったより少く、また、実験開始前の塗膜表面の艶に関して言えば、アクリル>エポキシ>ウレタンの順で少なく、アクリル樹脂の性能に関する期待が高くなったのは事実です。

今回の結果から、アクリル樹脂の結果が艶の発生及び耐候性に関しても良かった事を受けて、重要文化財に指定されている建物の近くに位置する暴露実験に使用可能な、機械類のカバー（図3）を使用して、アクリル樹脂を塗布した暴露実験を実施する予定です。

塗装で鉄構造物を保護するには、相当高級な塗料を使用しても概ね30年ほどかかります。今回のアクリル樹脂を塗布してどのくらい耐候性が持続するのか、3年なのか5年なのかその期間が特定できれば、今後の、鉄構造物をオリジナルに近い形で保存していく上で、特に維持、補修の計画策定に資する結果が得られると考えています。

（保存修復科学センター・中山俊介）

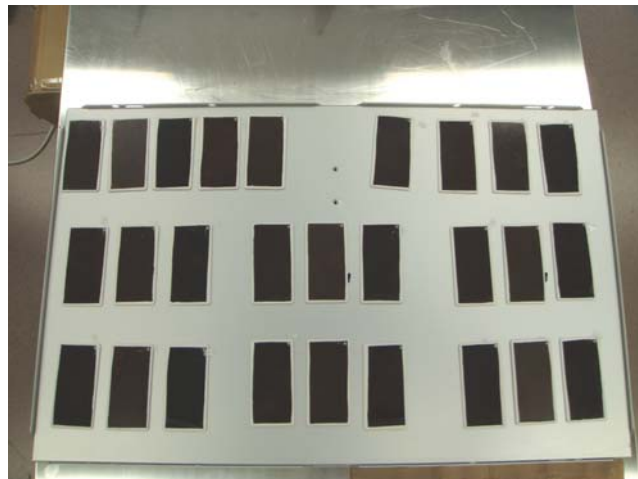


図2 耐候性試験用テストピース



図3 暴露実験に使用可能なモーターのカバー

「想-IMAGINE」 東文研版の起ち上げに向けて

企画情報部では、今年度中に連想検索技術を用いた情報探索サービス「想-IMAGINE」東文研版を起ち上げるべく、現在、準備を進めています。

「想-IMAGINE」とは国立情報学研究所が開発・公開している検索サービスです。これは図書館の蔵書データベース、書店や古書店の在庫データベース、文化財に関するデータベース、百科事典や観光情報など、さまざまなジャンルの情報源を横断検索し、さらにその中から深く知りたい情報を指定して、それを基点に連想を深めることを可能にしてくれるまったく新しい検索方法です。

「想-IMAGINE」では、国立美術館版、早稲田大学演劇博物館版など、機関独自のデータベースを組み合わせた検索サービスの運用が始まっています。東文研版もこれらと同様に、「美

術関係文献」「尾高コレクション」(1930年代に日本人研究者として初めてアフガニスタン、バーミヤーンを調査した尾高鮮之助の写真資料)などを組み合わせた独自の検索サービスになります。「美術関係文献」では約40万件のデータを、「尾高コレクション」では尾高が撮影した写真約2,000枚の画像データを公開します。文化財研究にとってたいへん有益な情報が発信できると期待されます。

(企画情報部・勝木言一郎)

美術家・美術関係者資料データベース・ 画廊資料データベースの公開

当研究所では、調査研究や資料整理のため、作家名や画廊名のリストを作成していますが、このたび、美術家・美術関係者資料データベース・画廊資料データベースとして「研究資料データベース検索システム」(<http://archives.tobunken.go.jp/internet/index.html>)上で公開を開始いたしました。前者は、



「想-IMAGINE」東文研版のブラウザ画面

19,947名の人名を収載し、その人の号名、出品歴、物故日などをご確認いただけます。後者は、521件の画廊名を収載し、画廊史のタイトルや、展覧会の開催情報の有無などをご確認いただけます。

また当研究所では、美術家・美術関係者・画廊や、笹木繁男氏主宰現代美術資料センターよりご寄贈いただいております資料のうち、薄手のカatalog、画廊ニュース、DM、チラシ、新聞記事などを作家資料ファイル、画廊資料ファイルに分けて収めています。現在公開中のデータベースでは、資料ファイルの有無のみ表示していますが、資料の細目についても、順次公開していく予定です。なお資料の閲覧については「資料ファイルの利用について」をご覧ください。

(企画情報部・中村節子)

文化財デジタルイメージ ギャラリーの新設

4月、当研究所のホームページに文化財デジタルイメージギャラリーを新設しました。

現在、そのコンテンツには「赤外線的眼で見る《昔語り》」「菊花に覆われた未完の武者絵」「国宝彦根屏風の共同調査」「古写真 名古屋城本丸御殿」が掲載されております。

「赤外線的眼で見る《昔語り》」では、1945年の空襲によって焼失した黒田清輝筆《昔語り》に関し、わずかに残った油彩による下絵を対象に、近赤外線撮影などの調査を行った結果を公表しています。また「菊花に覆われた未完の武者絵」では、ポーラ美術館の協力を得て、同館が所蔵する黒田清輝作品に関する光学的調査の研究成果を公表しています。

「国宝彦根屏風の共同調査」では、2006年度から翌年度にかけて行われた彦根屏風の修理



文化財デジタルイメージギャラリー

に際し、彦根城博物館と東京文化財研究所が実施した共同研究調査の成果の一部をご紹介します。そして「古写真 名古屋城本丸御殿」では、1938年に名古屋市公園課のご協力を得て撮影した名古屋城本丸御殿の写真（1945年に空襲により焼失）をご紹介します。

(企画情報部・勝木言一郎)

フランス・ギメ美術館と 東京文化財研究所との研究協力 及び交流に関する覚書の締結

5月24日、フランス・ギメ美術館と東京文化財研究所の間で、研究協力及び交流に関する覚書が締結されました。覚書は、ギメ美術館と当研究所が、研究者の交流、学術的活動の共同実施、シンポジウムなどの共同開催及び学術資料の交換等を実施することにより、文化遺産の調査・研究、保存修復に関する研究協力及び交流を強化・促進することを目的としています。



前列左から、中野副所長、ジェス館長、亀井所長、清水文化遺産国際協力センター長

当日はギメ美術館からジャック・ジェス館長及び尾本館長顧問を当研究所にお迎えして署名式を行い、当研究所職員が同席する中、ジェス館長と亀井所長により署名が交わされました。

(研究支援推進部・高柳明)

平成21年度事業の自己点検評価

4月21日に独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会の研究所調査研究等部会が東京文化財研究所において、6月3日に同総会が東京国立博物館において開催されました。前者は、東京と奈良の文化財研究所が平成21年度に実施した事業の実績をまとめ、それらを自ら点検し、評価したものに対して、外部評価委員の先生方から意見等をいただく会です。また、後者は、調査研究をふくめ、機構の事業全体と財務について意見をいただく会です。自己点検評価の対象となった東京文化財研究所の事業は41件です。自己点検評価では、そのすべての事業について、年度計画を100%達成し、十分な成果をあげ、中期目標を達成しつつあると判定しました。外部評価委員の先生方からは、両研究所の事業に対して次のような意見をいただきました。

1. 無形文化遺産の研究をはじめとした文化財の基礎的な研究、保存修復に関する先端的、かつ開発的な研究などにおいて、国の文化財行政に資する十分な研究成果を上げている。

2. 東アジア諸地域や西アジアにおいて、文化財保護に関する国際協力が精力的に行われている。その活動の成果を、日本国民のみならず、相手国の国民にも充分に知ってもらえるように努力してほしい。

3. 個別の調査研究の成果は素晴らしいものが多いが、それらが一般の人たちにもっと伝わりやすい形で、かつ全体を総括した形で発信されることが望ましい。

4. 今後は、セクションやジャンルを越えた研究、東京と奈良の両研究所が協力して行う研究、文化財研究所と博物館とによる共同研究、独立行政法人の特質を活かした研究などに積極的に取り組んで欲しい。

他にもたくさんの意見をいただきました。自己点検評価の結果や外部評価委員の先生方からのご意見は、今後の事業計画の策定や法人運営の改善に役立てます。

(副所長・中野照男)

人事異動

●平成22年3月31日付け

辞職

東京文化財研究所長（国立文化財機構理事）・
すずきのりお
鈴木規夫

●平成22年4月1日付け

採用

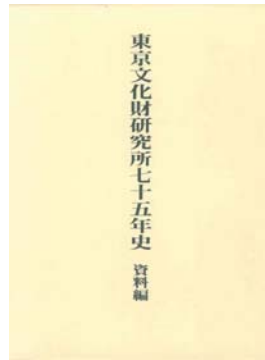
東京文化財研究所長（国立文化財機構理事）・
かめいのぶお
亀井伸雄

昇任

保存修復科学センター主任研究員・かとうまさと
加藤雅人

(p.16へ続く)

刊行物のご案内



『東京文化財研究所七十五年史 資料編』

1930年に母体となる美術研究所が開所して以降、当研究所は有形、無形の文化財に関する調査・研究を担ってきました。本書は2005年度までの当研究所の事業の記録とそれによって蓄積された文化財関係資料の目録を掲載しています。文化財に関する諸分野の研究史を探るためにも貴重な資料となっています。2008年、中央公論美術出版（03-3561-5993）、定価39,900円



『国宝 彦根屏風』

近世初期風俗画の代表的作品「彦根屏風」の調査報告書。当所は2カ年にわたり所蔵者の彦根城博物館と共同調査を行いました。高精細画像、近赤外線画像、蛍光画像など各種画像と、彩色材料分析結果を掲載し、本作品の表現に迫ります。2008年、中央公論美術出版（03-3561-5993）、定価27,300円



『黒田清輝フランス語資料集』

黒田清輝の未公開の手紙控えと日記（仏語、1888年）と、黒田宛欧文書簡を翻刻、和訳して、原文とともに収録した資料集です。2009年、中央公論美術出版、定価18,900円



『東大寺修二会の構成と所作』

無形文化遺産部の前身、芸能部の紀要『芸能の科学』の6.7.12.13巻として発行された同書が、復刊されました。佐藤道子研究員（現名誉研究員）が1967年から72年にかけて行った東大寺修二会の調査記録で、作法の次第、内容が詳細に記録された本書は、法会研究の嚆矢となっています。全4巻、2005年、法蔵館（075-343-5656）、揃58,000円



『文化財害虫カード』

"IPMワークショップ2004"で考案された教材（虫名刺）をもとに作成した害虫カードです。「文化財害虫事典」に準拠した主要害虫33点のカードは、切り取って保管できるほか、裏にはメモ欄が設けてあります。博物館等の現場でご活用いただけますと幸いです。2007年、（株）クパプロ（電話：03-3238-1689）、定価600円



『未来につながる人類の技4ー鉄道の保存と修復II』

「未来につながる人類の技」シリーズの第4巻目。鉄道関連施設の保存修復の国内外における実例を調査し、その実際と問題点および解決の試みを紹介します。2005年、エディトリR（03-3793-6640）



『バーミヤーン遺跡の地下探査 第1次および第2次 ミッションの成果』

バーミヤーン遺跡で2003年と2005年に行われた地下探査と試掘調査の報告書。地下探査と試掘調査の併用により、はじめてバーミヤーン遺跡の埋蔵文化財の姿が明らかにされました。2010年、明石書店（03-5818-1171）、定価10,290円

雇用の更新

文化遺産国際協力センター特別研究員・^{ありむらまこと}有村 誠

配置換

研究支援推進部長・^{きたでたけお}北出 猛夫同部管理室長・^{たかなぎあきら}高柳 明同部管理室係長（総務担当）・^{さきべつよし}崎部 剛同部管理室（企画渉外担当）・^{いでしんじ}井手 真二同部管理室係長（財務担当）・^{まさきとしひろ}正木 敏博同部管理室専門職員（契約担当）・^{かじやまとしお}梶山 利夫

所長表敬訪問（海外）

年月日	来 訪 者	目 的
22. 5.24	ギメ美術館長ジャック・ジエス氏	研究協力・交流覚書調印式

研究支援推進部・崎部 剛

ご案内

●黒田記念館特別公開

2010年11月3日（水）から11月7日（日）の午前9時30分から午後5時まで、上野の山文化ゾーンフェスティバル期間にあわせて、特別公開をいたします。

●第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会『「復興」と文化遺産』

日程：2011年1月19日（水）から21日（金）

会場：東京国立博物館平成館大講堂

10月中旬より参加登録の受付を開始します。詳細は、ホームページまたは下記までお問い合わせ下さい。

東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

TEL: 03-3823-4898

FAX: 03-3823-4867

E-mail: symposium2010@tobunken.go.jp

黒田記念館公開日カレンダー

■公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料

特別公開：11月3日（水）～11月7日（日）AM 9:30～PM 5:00

October 10							November 11							December 12						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					1	2		1	2	3	4	5	6				1	2	3	4
3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13	5	6	7	8	9	10	11
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20	12	13	14	15	16	17	18
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27	19	20	21	22	23	24	25
24/ 31	25	26	27	28	29	30	28	29	30					26	27	28	29	30	31	

編集後記

●いくつかの記事にうかがわれますように、調査研究、国際協力、情報発信などの方面で、今年度もまた新たな活動が始まりました。これらの活動が将来、研究プロジェクトとして大きく成長していくことが期待されます。

(企画情報部・勝木言一郎)

TOBUNKENNEWS no. 42

発行日：2010年8月31日

独立行政法人国立文化財機構

発行：東京文化財研究所

印刷：よしみ工業株式会社

編集：企画情報部